

スラヴ語スラヴ文学

◇教員◇

教授：三谷恵子

准教授：楯岡求美

助教：平野恵美子

◇学生◇

学部：7名、修士課程：3名、博士課程：6名

スラヴ語スラヴ文学研究室とは

スラヴ語スラヴ文学研究室は小さいながらも個性あふれた研究室です。ロシアはもとより、西はドイツに至るまでのヨーロッパ中部、北はバルト海沿岸から南はバルカン半島まで、広くスラヴ世界の言語文化の研究に取り組んでいます。地域の多様さだけではありません。研究分野も、スラヴ諸語比較言語学、ロシア、ポーランド、チェコ、バルカン半島の南スラヴの言語と文学、映画・演劇など諸芸術や文化、フォークロアなど、多様です。その広大で多彩な領域を逍遙し、自分のテーマを見つけ出すことは必ずしも容易ではありませんが、大きな楽しみでもあります。

教員、大学院生、学部生を問わず、学問上の経験や専門分野の違いを超えた自由な交流を尊ぶ気風は、研究室の良き伝統として受け継がれてきました。開かれた研究環境をモットーに、国内外から研究者、作家、アーティストなどの来訪者を積極的に受け入れています。研究会や読書会では授業とは一味違う「スラヴ文化体験」をすることもできるでしょう。

駒場からの進学にあたっては、ロシア語の基礎的な学力を身につけておくことが望ましいのは言うまでもありません。けれども進学してから勉強したのでは手遅れ、ということではありません。英語、ドイツ語、フランス語など西欧諸語についての知識も、スラヴ文化を学ぶ際に強力な武器にもなります。広い視野をもって積極的にさまざまな言語を学び、幅広い知識を習得されるよう、お勧めします。

東京大学は、ペテルブルク大学、ワルシャワ大学などスラヴ圏の大学と

も協定を結んでおり、留学に際しては個別に相談にのっています。

研究室のヒストリーと特色

本専修課程は 1972 年に創設された「ロシア語ロシア文学」専修課程を母体とし、1994 年「スラヴ語スラヴ文学」専修課程と名を改めました。1972 年当初からロシアに限らず「スラヴ学」というより広い視点からのアプローチが重要だとする認識をもち、スラヴ語スラヴ文学に関する多言語多文化の授業を開講してきました。

本専修課程の特色は、中世から近代・現代に至るまでの約 1000 年に及ぶスラヴの語学・文学・文化を、幅広く視野に入れている点にあると言ってよいでしょう。したがってロシア文学のみならず、ポーランド語ポーランド文学、旧ユーゴスラヴィア圏の言語と文化についての授業にも力を入れています。チェコ語も平成 25 年度より非常勤講師の出講をお願いしてチェコ研究への入り口を開き、平成 28 年度には、現代文芸論にチェコ文学が専門の阿部賢一先生が赴任したことで、スラヴ研究室でもチェコ文学の本格的な指導を受けることができるようになりました。

個人の人生経験は狭く限られたものでしかありませんが、言語の形成・変遷を追うとき、また、作家たちの深い洞察力によって描かれたスラヴ文学のしばしばエキセントリックにも思える世界に入る混むとき、多彩なものを見方をシミュレーションのように体験する機会を与えてくれます。

卒業生の進路：出版社や報道関係、一般企業などさまざまな仕事に就く者と、大学院進学を目指す者がほぼ同じぐらいの比率です。近年では修士課程修了後に一般企業へ就職する者もあり、選択肢が多様化してきました。

スタッフからの自己紹介です

スラヴ学においては、文学研究と言語研究は車の両輪のように不可分の関係にあるという考えを持ち、言語と文学の双方の教育と研究に力を入れてきました。以下、研究テーマと授業で扱う内容などについて紹介します。

三谷恵子教授：言語学の立場から、中・東欧地域の言語と文化の諸相を研究しています。ロシア語に代表されるスラヴ諸言語は相互によく似ており、そっくりな単語をみつけることは難しくありません。しかしまた、現代語の語彙、語形、構文などを比較すると異なりも多く見られます。そうした

共通性と異なりの起源や、それぞれの現代語に至ったプロセスを、文献の分析を中心に研究しています。また主要研究地域であるかつてのユーゴスラヴィア圏については、言語と社会や民族的アイデンティティの関係、また文学と地域の関わりといった問題にも関心をよせ、この地域の文学作品の翻訳も手がけています。言語学的基盤に立ちながら、同時に、言語がそれだけで自立するシステムではなく、言語を使用する主体の意識や社会のあり方との相互作用によって構築される動態であるという視点を持って、多角的な言語文化研究をめざしています。

楯岡求美准教授：ロシア及び旧ソ連圏の文学、演劇、映画などを研究対象としています。特に 20 世紀初頭のロシア・アヴァンギャルドの時代には、戦争や革命などによる大きな社会変動の中で、それまでの使い古した表現方法を解体し、新しい表現の可能性が実験的に探究されました。造語やコラージュによって意味と記号の関係を刷新するなど、それらは今の私たちの意識や世界観の土台を作っています。テレビやハリウッド映画などで日ごろ目にする喜怒哀楽を軸とする演技方法や演出なども、この時代のロシアで形作られました。

ロシアの 19 世紀もまた、日本の開国と文明開化同様、段階的に西欧化の波を受け、どのように社会を改善し、世界との関係を構築するか、悩み多き時代でした。100 年以上も前に書かれた小説を読んで、今の住む場所も時代も情報環境も違うはずなのに、自分探しや幸せ探し、社会の不正や貧困に苦悩する人々の姿に自分を重ねてしまうことも少なくありません。時空間を超える文学の力に驚嘆させられます。

平野恵美子助教：19 世紀末から 20 世紀初頭のロシアと西欧の芸術文化がテーマですが、特に革命前の帝室劇場のオペラとバレエ、20 世紀の舞踊やモードに大きな影響を与えたバレエ・リュスなどについて研究しています。と言っても、昔の舞踊や演奏を観たり聴いたりすることはできないので、当時の批評や回想録などを資料として扱っています。その頃の新聞記事などを読んでみると、自分の目的以外のニュースや広告などが目に入って来て、時々、100 年前の時代にタイムスリップしたかのような気持ちになります。この時代は、帝室劇場やバレエ・リュス以外にも、私立のオペラ団や、チャイコフスキー、ラフマニノフなど有名な芸術家が活躍しました。

こうした音楽、美術、舞踊等の芸術は、文学とも深い関わりがあります。ひとつの分野に区切ることなく、芸術文化を総括的に見る研究を遂行していきたいと考えています。

以上三名の所属教員の他、**沼野充義教授**（現代文芸論）、**阿部賢一准教授**にも授業等の面で協力をお願いしています。沼野教授はロシア・ポーランドの近現代文学を専門とし、亡命文学やSF、映画、日本とロシア・ポーランド間の翻訳・比較文学なども視野に入れた研究を行っています。阿部准教授はチェコ文学を中心に、翻訳論などにも造詣の深い研究者です。

スラヴ学の研究領域は非常に広大で多様であるため、専任の他に毎年、ラトヴィヤやブルガリアの言語と文化などについて、学外の非常勤講師の出講をお願いしてきました。今後も幅広い領域の授業を提供したいと考えています。

スラヴ世界に関心を持ったなら

「スラヴ」とひとことで言っても、そこにはかなり多くの国家、地域、民族が含まれており、ジャンルも多様です。そして私たちの研究室ではスラヴ諸国の語学、文学の研究を志す人のほかに、美術・演劇・音楽に魅せられた人など、様々な人々が学んでいます。私たちは学びたいと願う皆さんの熱意と自主性を受け入れ、それを支えることのできる学科であると自負しています。

進学に関する相談には随時応じますので、遠慮なく問い合わせして下さい。ホームページやフェイスブックにも情報を掲載しています。研究会や講演会他、研究室の様々な活動についての情報も得られます。時々通訳付きでも行っていますので、興味を持ったら気軽に参加してください。もちろん直接研究室を訪問して下さっても歓迎です。

研究室所在：本郷キャンパス 文学部3号館 8階（演習室は7階）

電話：03-5841-3847（学内内線 23847） e-mail：slav@l.u-tokyo.ac.jp

ホームページ：<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~slav/homepage.html>

Facebook：「東京大学スラヴ語スラヴ文学研究室」で検索

※次ページに二次元バーコードがありますのでご利用ください

スラヴ HP



スラヴ FB

